



杜甫の詩と生涯

目加田誠著作集 第七卷

杜甫の詩と生涯

目加田誠著作集
第七卷

昭和五九年六月一〇日 発行

著 者 目加田 誠

発行者 北村 正 光

印刷所 国際文化交易(株)

製本所 田中製本印刷(株)

発 行 所 株式 龍溪書 舎

東京都文京区白山二の十五の十二

郵便番号112

振替 東京 3176123

電話 東京 (818) 0932

目

次

杜甫の詩と生涯

序 説	七
杜甫の時代	九
少年の日	二
壯 遊	三
陸渾莊にて	六
李白との出あい	二〇
長安旅食の生活	二六
安祿山の反乱と詩人たちの運命	三七
国破れて山河あり	三八
鳳翔の行在——左拾遺杜甫	四九
北 征	一〇三
長安回復——裏切られゆく期待	一二四

華州にて——地方人民の実情	一四
漂泊の旅——秦州	一六
李白を夢む	一七
秦州から同谷へ	一八
同谷から成都へ	一九
浣花草堂	一九
蜀中転々	二五
工部員外郎	二九
江を下る	二九
夔州にて	三三
江陵にて	三六
洞庭漂泊	三六
杜甫年譜	三七
杜甫関係地図	三八

訳注	二五
----	----

後記	三三
----	----

解説（松浦友久・田口暢穂）	三五
---------------	----

詩題索引	
------	--

杜甫の詩と生涯

序 説

一九六四年の秋、私は學術代表団の一人として中国にわたり、西安から秦嶺の上を飛行機でとんで、四川省成都に行った。私としてはこの機会に、成都にある杜甫の草堂のあとを訪れてみたかったのである。

このあたりの田舎は、畑のところどころに竹藪があり、藪かげにわらぶきの農家があつて、まるで日本の田舎とちがわなかつた。成都の市街は、いわば京都をずっと田舎にしたような、品のいい、落ちついた町だつた。錦江という澄んだ川が流れている。昔、この川の水で蜀江の錦をあらつたという川である。それが成都の城南をめぐっているところに、浣花溪がある。杜甫の草堂は浣花溪のほとりにあつた。今からおよそ千二百年の昔、杜甫は苦しい放浪の旅の末、ここにたどりつき、知人たちの助けを得て、ささやかな草堂を設けた。そして僅か二、三年の間ではあつたが、ともかく彼の生涯で、比較的安静な生活ができたのである。それも永くはつづかず、やがてまたここを去つて、またもや彼の死ぬ日までつづく漂泊の旅にのぼつた。

杜甫が住んだ草堂は、文字どおりかやぶきの、ごく粗末なものであつたにちがいない。ところが今行ってみると、その草堂のあつた所に、実に堂々たる杜甫の廟があり、近年造られた杜甫記念館などもできていて、遊人は絶えることなく、廻廊をめぐり、広い庭園の竹の植えこみの間にたたずみ、柏

樹の下をそぞろ歩いている。休日などは特に雑沓しているようだ。ここに杜甫の廟ができたのは、杜甫が世を去ってから、そう時代を距てておらず、宋代以後、だんだん修復を重ねてきたもののようにある。それにしても、今日の中国において、あのように立派な設備がととのつて、一般人民の訪れるところとなつていようとは思いがけないほどであつた。

なぜ今日杜甫がそのように尊敬されるのであろうか。それは杜甫が、その生涯を通じて、国を憂え、苦しい自らの体験を通して、さらに広大なる人民の生活をわが憂いとして、詩を以てこれを訴えたからにはかならぬ。救世済民をわが責任と感ずるのは、古来中国の多くの知識人のつねである。しかし、彼ほどみずからの体験を通して、世の矛盾を訴え、平和を願い、及ばぬわが身を責めつづけた詩人はすくない。その詩は社会の現実を、あるいは流浪の旅の間に接する大自然の姿を、つきつめた写実の眼で詠じており、しかもその表現は、中国の詩の、最も凝縮され完成された様式であつた。

およそ中国文学の各ジャンルの中で、世界の文学に於ても高い地位を占めうるのは、何といつても詩であらう。その中国の詩に、すぐれた作家がいちばん多く輩出したのは唐代であり、その唐代の黄金時代は、盛唐、即ち玄宗皇帝の開元天宝の時代である。そしてその時代に於て特に聳えた両巨峯はいうまでもなく李白と杜甫であつた。言い換えれば、李白と杜甫こそ、中国の最も代表的な詩人であり、この二人が時代を同じうして生まれ、しかも二人の間に深い友情がかわされていたことは、実に面白いことであり、それでいて二人の詩の傾向は全く異なっているのである。李白は杜甫より十一歳年長で、その詩人としての活躍は、主として安史の乱以前の唐朝全盛の頃であり、杜甫の詩人としての活躍は、安史の乱中から乱後の、社会の最も混乱した時代である。端的にいえば、李白は盛唐浪漫

主義文学の絶頂であり、杜甫は彼以後に現われる現実主義の詩の開祖であるといってもいい。二人の生き方も、李白はその天才を、はげしい情熱によってほとぼしらせて、一生を通じて歓楽を追求し、凡俗を超えた仙境にあこがれ、杜甫は融通のきかぬ誠実な性格を以て、社稷の危殆、民生の艱難を思いつづけて、憂愁の中にその生涯を送ったのであった。

この二人の生き方の相違が、そのまま詩に現われて、李白が奔放自在な古詩や、神韻縹渺たる絶句にその並ぶもののない天才を示せば、杜甫は一字をもゆるがせにせぬ、詰屈贅牙な字句を、主として五七言の律詩にたたみこんで、高い格調を示した。われわれは、李白の詩をよんでは、その高く飛翔する浪漫精神に圧倒され、杜甫の詩をよんでは、千年以上を距てて生きる今日ながら、つねに変わらぬ世の中の矛盾と、それに対する杜甫の憤りと嘆きとを、切にわが身に感じて、重い憂愁に引き込まれるのである。

杜甫の時代

杜甫（字子美）の生まれたのは西暦七一二年、唐の先天元年、玄宗皇帝の即位した年であった。その翌年、開元と改まり、この開元の二十九年間は、実に唐朝の全盛時代であった。この頃豊年がつづき、国内は平和が保たれ、国外においては唐の国威は西は中央アジアの国々に及び、東は朝鮮、南は安南に及んで、首都長安は外国の使節、商人、留学生などが集まり、国際都市の観があった。西域の音楽、舞踊、雑伎は唐朝の人々の享楽に供せられ、酒場には碧眼の異国の女が、緑の酒をすすめた。

詩人は解放された自由な精神で、彼らの歌をそれぞれ高らかにうたった。唐の初め以来、宮廷では宴会のたびに勅命によって詩が詠ぜられ、典雅な律詩の方式が完成し、宮廷詩人が競ってその才能を示したが、それはいきおい儀礼的なものとなりがちであった。それが盛唐の頃になると、そうした平仄押韻、対句の規則正しい詩よりも、むしろ比較的自由な所謂古詩いふやうの形や、巷間で唱われる小曲にならった五七言絶句の形に於て、奔放な雄篇や、余韻のふかい抒情詩が多く作られた。初唐に於て完成された五七言律詩の格律の中に、深い情志を凝結して、新しい詩精神をこれに盛りこんだのは杜甫であった。唐朝の繁栄がその極に達した開元の世に於て、誰がこの英邁な玄宗皇帝の治世のはてに、あの忌わしい畏るべき安史の乱が起ころうと予想したろう。しかし、開元につづいて天宝の時代に入ると、目にあまる上層階級の奢侈と、伸び切った外国遠征の戦線補充のために、壮丁の徴集、租税の負担がはげしく、そのうえ連年飢饉がおそい、しかも天子はもはや政治への熱意を失い、宰相に人を得ず、下には人民の苦難が重なり、上には朝廷における権力の争いが深刻になって、さしも全盛の唐朝に、次第に崩壊のきざしがしのびよる。これをいち早く身を以て感じたのはほかならぬ杜甫であった。果して天宝十四載（七五五）、范陽の節度使安祿山が謀叛の旗を挙げてから、世は一挙に大混乱に陥り、それから足かけ九年にわたる安史（安祿山・史思明）の大乱に、中原は血なまぐさい戦場と化した。この頃南方にいた李白とちがい、杜甫はその身も賊中に陥り、一家離散し、この戦乱を直接体験して、国家の危機、民生の艱難に、みずから憂え、悩み、苦しむ、その間に生まれた詩は前代までの詩人たちの詩にはうかがい得ぬ深刻なものとなった。乱が平定した後、国内国外に兵乱がつづき、家族を引きつれて食を求めつつ漂泊しながら、杜甫はその生涯を終えたのである。

杜甫はつくづくこの世の憂うべく悲しむべきありさまを見て、これを救うために自分も何らかの貢獻をしたいと切に願うた。この世を救うためには、よりよい政治を実現せねばならぬ。そしてそのためには、まず上にある天子が、いにしえの堯舜のような聖天子になってくれる以外にはない、と思つたのである。この専制君主時代にあって、それよりほかの道は彼には考えられなかった。そして彼自身の抱負を実現するために、どうしても仕官の道を求めねばならなかった。むろんまた彼及び彼の家族の生活のためにも、その努力は必要であつた。しかし彼のその夢が実現する日は、たとえ生涯に僅か二、三年の間、官僚の末につらなる時期があつたにしても、遂に彼には恵まれず、不平と憂悶の連続であり、はては絶望以外になつたのである。

少年の日

杜甫の家は代々役人である。十三代昔の先祖には晋の名將で、春秋左氏伝の注を書いた將軍であり、学者でもあつた杜預^{どよ}がいた。杜預は京兆杜陵^{けいちやうとりやう}の人である。その曾孫^{そん}杜遜^{とん}が襄陽に移り、その後、依芸^{きぎ}が鞏^{きやう}県の令となり、河南省鞏^{きやう}県にうつる。依芸の子杜審言^{しんげん}が膳部員外郎^{ぜんぶいんがうらう}となり、初唐の詩人として特に律詩にすぐれていた。審言の子閑^{かん}は奉天^{ほうてん}（陝西乾^{かん}県）の県令となり、その子が杜甫である。つまり代々役人の家柄であり、従つて杜甫が自分もまた官僚としての地位を願ひ、政治への参与を自分の責任として考えつづけたのも、ここに關係なしとはせぬだらう。同時に祖父の杜審言が初唐第一流の詩人であつたことは、杜甫が、「詩は是れ我が家の事」（「宗武生日」後出）といい、ことに律詩に鍛練を

かさねたのも、やはり詩人の家柄という誇りを持っていたのである。

祖父の杜審言は非常に剛毅な自信の強い男で、そのために人に憎まれ、仇人のために無実の罪をきせられて獄につながれ、その上、事にかこつけて殺されようとしたとき、杜審言の子の并びというものが、僅か十三歳の少年だったが、彼らの陰謀を知って、仇人司馬季重を刺殺し、自分もその場で殺された。この事件は当時世間で大評判になったことだった。この并がつまり杜甫の叔父に当たる。杜甫の剛直な精神も、またその先祖の血をひくものがあったのだろうか。

杜甫の父閑は上述のように奉天の県令に終わったが、これは杜甫のいくつの歳まで生きていたかわからない。天宝に入ってなくなったことは考えられる。そうすると杜甫の三十歳以後まで生きていたことになるが、その割には杜甫の詩文にあまり出てこない。恐らく父は地方官として離れていたであろう。

母は清河の崔氏の出で、もともと崔氏というのは唐代ではかなり大きな一族である。この母は杜甫の幼少の時に死んだ。そして杜甫は洛陽の姑母こぼの手もとで養われた。あるときこの姑母の子と同時に病氣にかかったことがある。巫女に問うと、病人を部屋の東南隅に置けばよくなる、といった。姑母は自分の子に移して、代わりに杜甫をそこに置いた。そして姑母の子は死んで、杜甫は生き永らえた。後になって杜甫は姑母の恩に泣いたのである。

こうした子供の時のことは、大人になってから、いつもなつかしく想い出される。杜甫も晩年、憂愁の生活の中で、遠い昔を想い出して詩を作った。「百憂集行」(後出)の一節に、

憶年十五心尙孩
健如黃犢走復來
庭前八月梨棗熟
一日上樹能千廻

憶う年十五 心尙お孩にして
健なること黃犢の如く走りて復た來り
庭前八月 梨棗熟すれば
一日 樹に上ること能く千回なりき

と詠っている。

この詩を作ったのは、杜甫が年五十の時である。貧病衰残の身に、憂愁の限りなく集まるとき、小牛の如く駆けまわり、一日にいくたびとなく棗の樹によじのぼってはむさぼり食べた幼い日が、楽しく、またかなしく想い起こされたのだろう。「一日樹に上ること能く千回」という誇張した歌い方に、作者の胸をしめつけるほどの少年の日の恋しさがこめられている。

しかし、一方に於て、彼は早熟の少年でもあった。六歳の時、公孫大娘が劍器や渾脱を舞うのを観た記憶がのちの詩に出てくるし、七歳で早くも詩を吟じたともいう。この早熟な少年の才能は、洛陽の名士たちに愛されて、岐王李範や崔滌の邸にも出入した。二十歳以前でもう酒をたしなみ、「悪を疾んで剛腸を懷」き（「壯遊」）、凡庸な仲間を無視して、好んで年長者とつき合っていたものようである。

壯遊

開元十八年（七三〇）、年十九のとき、山西に遊び、翌年から三年間、とおく吳越の地方まで旅に

出た。山河を跋涉し、名山大川を觀、天下の形勢を知ること、何よりも見聞を広め、自己を形成してゆく上に必要なことであつた。開元二十三年（七三五）、二十四歳、洛陽に帰つて、進士の試験に落第し、翌年から又々四、五年の間、齊・趙（山東・河北）の旅に出る。これらの遊歴は、必ずや彼の詩囊を豊かにしたことと思われるけれども、惜しいことに當時の詩というものは、一つも伝えられていない。開元二十八年、二十九歳の頃かと思われるが、當時彼の父杜閑が兗州（山東省滋陽県）の司馬の官にあつたので、父を訪ねて兗州にゆき、その城樓に登つて詠じた詩があり、これ以後、彼の詩がだんだん伝えられている。

登兗州城樓

東郡趨庭日

南樓縱目初

浮雲連海岱

平野入青徐

孤嶂秦碑在

荒城魯殿餘

從來多古意

臨眺獨躊躇

兗州の城樓に登る

東郡庭に趨る日

南樓目を縦にする初め

浮雲海岱に連なり

平野青徐に入る

孤嶂秦碑在り

荒城魯殿余る

從來古意多し

臨眺ひとり躊躇す